

【東京都知事賞】

コロンボ寄金

松田 征士

1. 上海へお墓参り

今年のゴールデンウィークには、家内と長男を伴って家族揃って上海・蘇州へ旅行しました。蘇州生れの謝さんがガイド役を申し出てくれたのです。「今年はアイリーンが亡くなって7回忌になるので、墓参りに上海に行きませんか？」とお誘いがあったのです。

上海郊外の広大な墓所に、アイリーン馬さんのお墓がありました。お墓にはありし日の馬さんのこやかな写真が焼かれています。お墓のあり方の違いが珍しいです。お墓には「無琴音的生難成詩」、「有月亮的星空才美麗」と刻印されています。馬さんは生前、お琴を弾き、英月が名前でした。馬さんが居なくなつた今、琴の音の無いような人生だし、月の無い星空は美しく感じない。ご主人の謝さんの奥様に対する偲びの深さを現すものです。お花を添えお焼香し合掌しました。馬さんは30台半ばの短い人生でした。馬さんの笑顔や、数々の事件など、走馬灯のように

浮かび上がりました。私と中国人夫妻との深い絆のお話です。

2. 出会い

十年ほど前のお話です。残暑が残る8月の末の頃です。仕事が終わって、私は同僚を誘います。会社近くの行きつけの居酒屋にいき、会社の不平不満や愚痴を飛ばすのです。よくある風景です。

店は比較的空いていました。テーブルに向かい合って座りました。間もなく、見かけない顔のウエイトレスがやってきます。

「イラシヤマセ」奇妙なアクセントが聞こえました。

名札を見ると「馬」と書いてあります。

瞳がクルクルして黒い髪を短くまとめて、すっきりとした娘さんでした。

「中国の方？ マーさん？」

「ソーデス、ナニシマスカ？」

「では、ビールを、とりあえず、それに枝豆」

「ビール、エダ？ ナニデスネ」

「大丈夫ですか？」

何だか頼りなく心細そうでした。それが馬さんとの最初の出会いでした。勘定を済ますときに云いました。

「貴女も慣れない見知らぬ外国で大変でしょうが、がんばりなさい」

「アリガトゴザマス、シンセツコトバ ハジメテデス」彼女の顔がパット明るくなりました。店を出たときには昼間の熱気もすっかり取れていました。

日本は四方が海に囲まれ、長い鎖国があり、ほぼ同一民族で人口が構成されています。そのせいか、見かけない人や見知らぬ人の違いを受け入れない気質、むしろ拒否する意識が強く我々の頭に残っているようです。一方で我国は経済大国を誇り、他国からみればそれこそ黄金の国に見えています。けれど、外国人がこの国で暮らしていくのは並大抵ではありません。

居酒屋での馬さんとの最初の出会いの前夜、たまたまテレビドラマの「刑事コロンボ」を観ていたのです。ある一場面だけは一つきりと覚えていたのです。コロンボ刑事が捜査に行った豪華な大邸宅でヒスパニック系のお手伝いさんが出てきます。コロンボ刑事が質問しても英語が通じません。で、コロンボ刑事はお上げと、両手を上げてスペイン語で言います。

「貴女も慣れない見知らぬ外国で大変でしょうが、がんばりなさい」

コロンボ刑事のそういった気持ち、そういった言葉を、この日本で言う人はいないのでは？ と思ったのです。さすが、アメリカ、移民の国だと感じました。コロンボ刑事と全く同じ言葉を馬さんにぶつけたのです。その時の馬さんの表情は忘れられません。

「アリガトゴザマス、シンセツ、ハジメテデス」

大きな目を見開いて顔をほころばせて云ってくれたのです。私もすっかりうれしくなりました。そうした親切さや優しい言葉が地球を廻れば良いなとほんやりと思ったものでした。

3. 馬さん

その後もその居酒屋へ何度も行きました。

「お元気ですか？ 何か困ったことはありませんか？」

「ダイジョウブ、アリガトゴザイマス」

「何かあったら、云いなさい、電話をしなさい」名刺を渡しました。

十日ほど後、会社の電話がなりました。中華料理店で会いました。

「いつもアリガトゴザイマス。お店で松田さんのような優しい言葉を云う人はいません」私はコロンボ刑事の話をしました。拙い英語と日本語を混ぜての会話です。馬さんは上海の出身です。現在、家族はオーストラリアに住んでいます。馬さんは日本語を学ぶために来日しています。オーストラリア、中国それに日本を結んで三角貿易を将来したいというのが彼女の夢でした。日本では一人も頼りにする人がいない。今後、相談に乗ってもらいたいというものでした。食事が終わると、お皿の残り物をすべて、馬さんは自分のお弁当箱に詰めました。店は駄目ですよといいましたが、「これはお金を支払ったものだから」と主張し、「持つて帰ります」ときっぱりいきました。それから3ヶ月に一度ぐらいの割合で近況報告を聞きました。会うたびに馬さんの日本語はめ

きめき上達してきました。

馬さんは上海工科大学を卒業している才媛でした。日本語学校の1年間が終わり、馬さんはシドニーの家族の元に帰ってきました。数ヶ月後突然、私宛に皮の財布、コインパス、キーホルダーなどが手紙と一緒に送られてきました。美しく精巧に出来ていました。彼女は、オーストラリアに戻ってからは、オーストラリア先住民民族のデザインをコンピュータグラフィック化し、上海の知人にメールします。そのデザインを取り入れた小物を中国本土で製造し、シドニーの土産物店に卸す仕事を始めたのです。そのたくましさに感心しました。二年後、2000年開催のシドニーオリンピックを見込んでいたのです。日本でも売れないでしょうかという相談でした。手紙の最後に気になることが書いてありました。

「最近、私、奇妙なのです。風邪が長引いて直らないのです。呼吸が苦しくて病院に通っています」とありました。私はお大事にと書きました。

半年ほど経ったある日、会社に馬さんから電話がかかってきました。

「どこにいますか？」

「ひょっとして東京？」

「そうです。私結婚しました。主人は謝といいます。お医者さんです」

「わあ、おめでとう」

「小手指に住んでいます。こんどご家族揃って遊びに来てください。上海料理を手造りします」

ご結婚のお祝いを兼ねて、家族揃ってお邪魔しました。小手指の新築マンションでした。二年ぶりぐらいにあった馬さんは、見違えるようにすっきり細身に痩せていました。馬さんの料理は一週間も前から仕込むような本格的な料理でした。馬夫人家庭料理店を東京で開けば繁盛するに違いないなどと話しが大いに盛り上がりました。老酒もしたたかご主人の謝さんと酌み交わしました。

けれどその時、既に馬さんは重い肺の病気に罹っていたのでした。入院ベッドが空くのを待っていた間に、手料理をご馳走してくれたのです。馬さんの精一杯のお返しだったのです。家族揃って馬さんの手料理をおいしく戴いたのでした。

4. 文化大革命

今度は、お二人を自宅へ招待しました。お付き合いが深まっていきました。二、三度行き来した、ある日謝さんが打ち明けました。

謝さんは上海第一医科大学の卒業です。現在は日本国籍をもっています。日本での医師免許はありませんので、医療行為は出来ません。それで、日本の医療機器メーカーで機械が医学的に効用するのか検証する役職です。医療技術者として勤務できたのです。現在も、中国での医療器械製造工程の立会いや検査の業務に適役として活躍中です。

「私の父は医学部の教授でしたが、文化大革命の時、捕えられてその後行方不明です。馬さんの

お父さんも工科大学の教授で私の父と同じ運命でした。それで、私たち家族はアメリカに、馬さんの家族はオーストラリアに亡命しました」衝撃的な告白でした。謝さんも馬さんも高校へは行けず、独学で大学受験に臨んで合格したそうです。双方のお父さんの行方は未だ知れません。多分、矯正労働所での過酷な労働と貧しい食事に耐えられず亡くなったと諦めていますと、悲しそうでした。

戦前の植民地支配から解放を勝ち得た毛沢東は共産党一党独裁支配の下、1960年代から70年代の初めまで文化大革命を引き起こしました。その嵐が中国全土を吹き荒れました。「文化」と「大革命」の名を借りていますが、その内容は悲劇的な事件です。毛沢東の農業や経済政策が行き詰まり、国は貧しく、国民も疲弊していました。政府は豊かにならないのは、汗水を流さない知識階級がのうのうと批判ばかりしているからだと言った知識階級の弾圧をおこなない、批判の矛先をかわしたのです。純真無垢な若い紅衛兵を手足に使って、研究者、科学者、学者、教授、共産党の幹部など、批判分子を次々摘発し現場で農業を学ばせる為にと、地方の矯正労働所へ送ったのです。知識もお金も貧しいレベルに落とせば平等公平が図れるという考えです。そうして毛沢東は権力基盤を固め、政権を維持したのです。けれど知的階級が居なくなつたため、中国の科学や工業、あらゆる先進化が欧米諸国と較べて10年から20年遅れたと、謝さんは述べました。

5. 馬さんの入院

馬さんが謝さんと結婚し日本に来たのは病気のせいで入院が目的でした。仙台の東北大学の医学部がその権威と謝さんが聞きつけて馬さんと呼んだのです。中国籍の馬さんの入国に際して、日本国籍を既に取得していた謝さんは馬さんを妻として籍をいれ、日本に迎え入れたのです。二人は遠い縁戚関係にあり、幼馴染でもありました。お互いに好意を寄せ合ってもいたのです。そこで、謝さんは決心し小手指に新居を購入したのです。

馬さんの病気はオーストラリアの病院でも原因が分らず、治療法もなく、お手上げの状態だったのです。病気は肺胞膜が筋肉化して酸素の流入が出来なくなっていくのです。肺胞膜は血液と空気のガス交換をする役割を果たしますが、それが出来なくなる奇病なのです。勿論、原因も全く不明です。治療法もありません。唯一、臓器移植が残された手段でした。

6. 臓器移植

東北大学に馬さんは入院しました。毎週欠かさず週末の夜には謝さんは馬さんの病床に駆けつけました。週末の二日間、馬さんのベッドのそばに付きっ切りです。馬さんは次第にやせ衰えていきます。息が吸えず、呼吸が苦しそうです。酸素ボンベをつけても苦しいのです。その苦しさの中でも馬さんはお医者さんや看護婦さん、同床の人達へ笑顔を忘れません。

臓器移植には多くの難関があります。治療入院だけでなく、献体者を待つ間の長期入院、臓器移植を待つ大勢の人々、患者の体質、血液型が合致する献体の出現、などなどです。何より、大きな費用が必要です。最終的には1億円を超えるのです。彼らには頼るべき人々が周りにはいません。私に何ができるだろうかと悩み考え始めました。何かしてあげたいとどこかしら気持ちです。でもどうしようもありません。といって、見捨てておいていいのかと自分を責めました。馬さんの病気は日々進行しているのです。

7. 「コロンボ寄金」

私は悩みました。サラリーマンである私に出来る援助はしれています。友人知人に打ち明け相談しました。すると、2、3の友人からメールで寄付をしてもいいと申し出がありました。そのいきさつを書いて送信してみてもどうかと提案がありました。それで、実行に移したのです。コロンボ刑事の話、文化大革命の話、亡命の話し、肺移植の話などを詳しく書いて約300名の人々に寄付をおねがいましたのです。「コロンボ寄金」として銀行口座も造りました。するとどうでしょうか、毎日、入金されてきたのです。全く見知らぬ人、名前が初めての人など、メールを送信していない人々からも入金されてきます。誰かが何処かで話してくれているのです。

寄付者氏名と金額、残高など毎日、メールで公開報告しました。私は寄付を頂いた方を裏切らないように細心の注意を払いました。謝さんが送ってくれる病室での馬さんの写真や様子を書い

た手紙なども順次メール公開しました。

私の行きつけのバーや居酒屋の主人も賛同して、「コロナボ寄金」の詳細をお客様に配り、壁に貼って、カウンターのの上に募金箱をおいていれくれました。見知らぬお客様同士の話題にもなったそうです。募金額も口座に入金し発表しました。

私一人の力じゃない。一人の善意ではない。どうして？ どうして？ 何で？ 何で？と驚くことの連続です。この親切さや優しさは何？ 現代人、都会人は薄情になっていると聞くけれど、全くそんなことはありません。見知らぬ中国人の病気に對する寄付です。人の優しさに自分自身の心が洗われていきます。すごいことになってきました。私にも多くの人々と新たな絆が構築されました。その人々とは今もお付き合いが、年賀状程度ですが、続いています。感謝と感動で眠れない夜が続きました。

けれど、良い人ばかりではありません。中には誹謗中傷メールや葉書がありました。

「お前の女が病気しようが死のうが俺の知ったことではない」と云った下劣な内容です。しかし、そうしたものは数える程です。無論、相手の住所も名前も分りません。柱の陰に隠れて、石を投げている哀しい寂しい人なのです。百数十名の人々から100万円を少し超える寄付金となりました。謝さんに手渡ししました。1億円には遠く及びません。けれど、謝さんと馬さんは日本人の深い愛情や親切に触れたのです。日本は世界一良い国、日本人ほど良い人は世界中に居ないと云いました。文化大革命で父を喪い、亡命した家族との対比に、日本人との新しい絆を考えると自然

に出た言葉です。約1年間の闘病生活でした。馬さんは臓器提供者が出てくるのを辛抱強く待っていました。けれど虚しい結果となりました。けれど彼女は多くの日本人の善意を感じて深い喜びの中で逝ったのです。

我々は平和な国にすみ、親切で善意ある人として自覚してもいいし、またしなければいけないと思うのです。「新しい絆」を考えるとき、家族間は勿論、これからは広く絆を捜し求めて、弱い立場の人々に貢献できること、我々日本人が世界の貧しい弱い人々に何を提供できるのかを考える、そうして行動する。一人ではどうしようもないと考えずに、一人が始めたことが大きな広がりのある力強い絆となる。そうしたことが「新しい絆」造りの始まりではないかと「コロナボ寄金」を通じて教えられ、確信したのです。